修士論文（要旨）
2016 年 7 月

中国人留学生の自律学習の変化および変化に影響を与える要因

―　大学予備教育機関から大学への進学者を中心に　―

指導　　齋藤　伸子　　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
214J3902
王丹丹

Master's Thesis(Abstract)
July 2016

A Study of Change and Factors Affecting Change in Autonomous Learning among Chinese Students in Japan: Focusing on Their Advancement from Preparatory Schools to Universities

WANG DAN DAN
214J3902
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J.F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第 1 章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.1　研究背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1.2　研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第 2 章　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
2.1　学習者の自律性（learner autonomy）の歴史と定義・・・・・・・・・・2
2.2　自律学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
2.3　自律学習の四段階と自律学習を支える下位能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
2.4　第二言語学習／習得研究の個別性モデル・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第 3 章　調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3.1　調査目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3.2　調査対象者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
3.3　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第 4 章　分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
4.1　データの分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
4.2　分析結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
4.2.1　CL1 のインタビュー結果に対する分析・・・・・・・・・・・・・・・・9
4.2.2　CL2 のインタビュー結果に対する分析・・・・・・・・・・・・・・・・20
4.2.3　CL3 のインタビュー結果に対する分析・・・・・・・・・・・・・・・・29
4.2.4　CL4 のインタビュー結果に対する分析・・・・・・・・・・・・・・・・36

第 5 章　考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
5.1　学習者要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
5.1.1　動機づけの変化の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
5.1.2　日本語能力の変化の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
5.2　社会文化的要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
5.2.1　親戚からの支援と情報提供・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
5.2.2　日本社会とのつながり―アルバイト・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5.3　学習環境的要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5.3.1　教師の役割の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
5.3.2　チュートリアルという授業の影響・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

第 6 章　まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

【参考文献】
【添付資料】

要旨

【キーワード】　自律学習の変化，変化の影響要因，大学予備教育機関，教師の役割，チュートリアル

本研究は，学習者の自律性を重視する大学予備教育機関から大学まで進学した中国人学習者の自律学習の変化の軌跡と影響要因を検討する質的研究である。本研究では，青木（1996），『日本語教育重要用語 1000』（1998），青木・田中（2011），藤田（2014）の研究を踏まえ，自律学習を「学習者が自律性を用いて学習することを指す。具体的には，学習者が自分の学習を自分で管理する意識を持ち，自分の学習目標と学習内容を達成するために，学習計画を立て，学習方法を選択し，周りの学習リソースを用いて学習し，最後に自分の学習を評価するプロセスである」と定義する。

本研究のフィールドとした A 大学の留学生別科は，留学生の学習ニーズや学習目的などの多様化に対応するため，学習者の自律性の育成を重視する特徴を持っている。その特徴は具体的には二つの点にまとめられる。一つはチュートリアルという授業の導入である。二つ目は A 別科の教師は学習者の「能動性」を重視し，授業中にある程度学習者に「主導権」を与えることである。チュートリアルは「学習者の自律を目指した個別対応型の日本語授業である。」（三宅　2007：22）それは留学生の増加がもたらした日本語力や基礎学力，ニーズなどの一連の学習者個別性にかかわる問題に対処するために開発された授業形態である。このような自律性を重視するという共通点を持つ予備教育機関から大学まで進学した留学生のそれぞれのフィールドにおける自律学習がどのような様子か，フィールドの変化がもたらした自律学習の変化はどのような特徴を持っているか，また各段階において，どのような要因が自律学習の過程に影響を与えるかを探るのが本研究の目的である。

本研究では A 別科から大学まで進学した四人の留学生の調査協力者（CL1，CL2，CL3，CL4）に，この二つのフィールドにおける学習状態や自律的な意識，教師に対する認識についてインタビュー調査を行った。

また，インタビューのデータを文字化し，大谷尚（2011）の SCAT の方法に基づき，4 ステップでコーディング分析を行い，その結果を「別科に入る前」，「別科に入った後」，「大学に入った後」という三つの時間帯に分けてストーリーラインで記述し，分析を行った。さらに分析の結果によって，自律学習の定義に基づき，調査協力者の別科から大学までの学習状態の変化を「学習目標」，「学習内容」，「学習リソース」，「学習ストラテジー」，「学習評価」，「自分の学習に対する認識」という六つの項目に分けて学習状態の変化の表を作成した。ストーリーラインによれば，四人の調査協力者は別科において，まず自分の学習目標を決め，その目標を達成するために工夫した。別科の教師やチュートリアルなどの自律性を重視する教育の影響で，彼らの自律学習も変化した。CL1 はもともと自律性を持っていたが，日本語能力が低かったため，最初は教師の指導通りに学習するしかなかった。日本語レベルの向上とともに，CL1 は徐々に自分の学習の主導権を握った。CL2 は第一学期に，学習目標を達成できなかったため，学習の動機を失い，自律的な学習行動もなかった。第二学期になると新たな目標を決めた彼女は教師の指導を受けながら，自らリソースなどを探して日本語を学習した。CL3 と CL4 はまだ自ら学習を管理する必要性がわからなかったが，自分

の目標を達成するために，自分でリソースを探し，自分の学習ニーズや日本語能力を合わせて学習ストラテジーを使い，日本語を学習した。一方，四人の調査協力者は大学に入ると，大学の学習環境の変化，特に教師の役割の変化によって，「自分の学習を自分で管理しなければならない」という意識を生じ，自律的な学習の行動も多くなった。

また，ストーリーラインに対する分析の結果を踏まえ，「学習者要因」，「社会文化的要因」，「学習環境的要因」という三つの枠組によって，彼らの自律学習の変化の影響要因を「学習者の日本語能力の変化」，「学習者の学習動機の変化」，「日本にいる親せきからの支援と情報提供」，「アルバイトの影響」，「教師の役割の変化」，「チュートリアルの影響」という六つをまとめた。さらに，その要因は四人の研究協力者の情意，生活，日本語能力など様々な面に与える影響によって，彼らの自律学習の行動と自律的な意識の変化を促すことが分かった。また，同じ要因であっても，違う学習者に与える影響がまったく異なるという点からみると，学習者の自律性を育てたい場合，学習者の個別性を対応し，一人ひとりの学習者の学習状況や自律性などを把握したうえで，教師の役割や指導の仕方を変えることが非常に重要だと思われる。

本研究はフィールドの変化によって，学習者の自律学習が変化する可能性が高いということと変化の様子，その変化に与える影響要因を明らかにした。しかし，フィールドの範囲は小さいため，研究できる対象も限られ，研究の結果の対応範囲もそれほど大きくないといえる。また，四人の調査協力者の自律学習の変化の影響要因を考察しただけで，各要因の間の相互関係について検討できなかった。したがって，今後の課題として，本研究でまとめた自律学習の変化の影響要因の間の相互関係について詳しく研究するつもりである。

参考文献

青木直子（1996）"Autonomous Learning: What, why and how ?", ASTE Newsletter, no.35

青木直子（1998).「学習者オートノミーと教師の役割」『報告書―自律学習をどう支援するか』分野別専門日本語教育研究会 p.23

青木直子(2005)「自律学習」 日本語教育学会編『新版日本語教育事典』 大修館書店 pp.773-774

青木直子(2008)「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』第56号, 大修館,pp.10-13.

青木直子（2011）「自律学習」 青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー－日本語教育と外国語教育の未来のために－』 ひつじ書房 pp.2-3

安藤史高（2006）「自律性欲求と仮想的有能感との関連について」『一宮女子短期大学紀要』第45号 pp. 121-128

オレック，アンリ（2011）「言語学習におけるオートノミー」 青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー－日本語教育と外国語教育の未来のために－』 ひつじ書房 pp.25-44

今井光子（2014）「学習者のストラテジーから見る自律性の考察―研究ノート―」 『論叢』 玉川大学文学部紀要 第54号 pp. 241-248

梅田康子（2005）「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割－学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る－」 『言語と文化 ： 愛知大学語学教育研究室紀要 第39巻 12号』pp.59-77

梅田康子（2006）「日本語予備教育における内容重視型日本語教育の試み―留学生別科における「日本事情」に関する一考察―」 『言語と文化 ： 愛知大学語学教育研究室紀要 第39巻 15号』pp.59-78

大谷尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 －着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2）』, pp.27-44

大谷尚（2011）「SCAT ： Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法―」, 『感性工学』, 10(3),日本感性工学会, pp.155-160

桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」(2007)『自律を目指すことばの学習』凡人社

海保あづさ（2007)「大学短期留学生の自律性に関する一考察」 桜美林大学

衣川隆生（2010)「自律学習能力の育成を図る教室活動 - モニタリングと自己評価の基準確立を目指して - 」2010年度 第２回日本語教育巡回研修会 ワークショップ１

クラントン（2003）入江他訳『おとなの学びを拓く-自己決定と意識変容を目指して-』鳳書房 （原著：Cranton, A Patricia, “Working with Adult Learners”, 1992.）

河内山明子(2013)「自律的学習者要因はどのように成績に差をもたらすのか―動機づけ, 情意, メタ認知方略, 認知方略, 能力による学習モデル―」『JACET-KANTO journal』9号 pp. 25-34

丹羽里美（2015）「自律的学習に影響する家庭要因の検討：愛着に焦点づけて」『四天王寺大学紀要』 60号 pp. 289-300

寺下貴美（2011）「第７回 質的研究方法論:質的データを科学的に分析するために」『日本放射線技術学会雑誌』67号 pp.413-417

日本語教育学会（1982）編『日本語教育事典』　大修館書店
林さと子（1998）「第二言語学習／習得と個別性要因」『第二言語としての日本語学習および英語学習の個別性要因に関する基礎的研究』平成８～９年度科学研究費補助金研究報告書
林さと子（2006）『第二言語学習と個別性 ： ことばを学ぶ一人ひとりを理解する』春風社　pp. 52
藤田裕子（2014）「日本語上級学習者の自律性を高めるための授業活動の効果と課題」『桜美林言語教育論叢』10 号　pp. 103-118
堀井恵子（2004）「日本留学試験の「日本語」シラバスを再考する―「アカデミック・ジャパニーズ」と言う概念を教育に埋め込む試みから―」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ研究成果中間報告書（2）』pp. 16-29
松井一美・板橋民子・吉里さち子（2013）「地域社会は日本語学習者に何を求めているのか ： アルバイト先での半構造化インタビューのSCAT分析から」『日本語教育方法研究会誌』20号　pp. 12－13
李麗麗（2011）「中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査 ： 正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察」『桜美林言語教育論叢』7 号　pp. 17－31

Benson, P.,(2003). A Bacardi by pool. In Barfield , A. &Nix, M.(Eds.), Autonomy you ask (pp.275-282).Tokyo: Japan Association for Language Teaching
Deci, E.L. & Ryan, R.M（1985）. Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plen r um.
Dickinson, L.(1987). Self-instruction in language learning. Cambridge: Cambridge University Press
Kobak, R.R. & Sceery, A.（1988）. Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representations of self and others. *Child Development*, *59*, 35-146.
Pintrich ,P. R., & De Groot ,E. VL (1990) Motivational and self-regulated learning components of classroom academic performance ,.Journal of Educational Psychology 82(1) ,33-40,
Wallace, B. and Oxford, R.L. (1992). Disparity in learning styles and teaching styles in the ESL classroom: Does this mean war AMTESOL Journal, 1: 45-68